温かく大会支える

玉野市の東児が丘マリンヒルズGCで行われている女子プロゴルフのステップ・アップ・ツアー「山陽新聞レディースカップ」。一昨年は1万5千人近くが来場するなど、レギュラーツアー並みのギャラリーが詰め掛ける大会を支えているのがボランティアだ。今年は3日間で延べ約470人が協力を予定し、第2日の15日は165人が奮闘した。（1面関連）

18番グリーン脇でリーダーボードの表示を差し替えるボランティアら＝15日午後0時23分、東児が丘マリンヒルズGC

ボランティア「やりがい実感」

「おはようございます」。早朝から続々と訪れる人たちに組み合わせ表を配った鳥越英明さん(67)＝同市宇野＝は2010年の初回から欠かさず参加。「回を重ねるごとに来場者が増え、玉野のにぎわいにつながっていると実感する」と笑顔を見せた。

若手の育成を狙いとしたステップ・アップ・ツアー。観客整理に当たった仲西正之さん(74)＝岡山市北区東花尻＝は14日に新人の吉本ここね選手のホールインワンを見たといい、「積極的な攻めが楽しみ。岡山から若手が羽ばたいてほしい」と選手たちを温かいまなざしで見守った。

最終18番ホールで上位選手のスコアを速報するリーダーボードの表示も役割で、「プレーの合間に素早く更新するのは緊張するが、やりがいを感じる」と寺門幹夫さん(65)＝同御津宇垣。目まぐるしく変わるスコアを差し替えた。

この日は地元・玉野商工高の生徒8人も協力した。スタンプラリーの押印をした1年田代結莉さん(16)は「ギャラリーもボランティアもすごく多くて、びっくり。温かく声を掛けてくれる人がいて、うれしかった」とほほ笑んだ。

16日は玉野高、光南高の生徒を含め187人が参加する。日本女子プロゴルフ協会の小池新・トーナメント事業部第2グループ長(36)は「21大会あるステップ・アップ・ツアーで最多のギャラリーを受け入れられるのはボランティアのおかげ。地域に根差した大会のモデルだ」と話した。

（松山定道）

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。